

## 涼風(すずかぜ)巻Ⅲ

将来的にその変形が現れるかもしれない。それを進化形と呼ばない。なぜなら、食の多様性・多態性を前提として考えているから。つまり、これもあり。将来現れるその形もあり。ということになる。前回の「物足りなさ」を解消し、製品として「これ以上やりようがない」完成形であるが、お鮓なるものは、芸術性を併せ持つ側面も存在する。音楽に



例えると、J a z z (ライブ)に近い様な気がする。曲調がある程度担保されれば、多少の変化があっても、それはそれとして、一つの表現「作品」として許容されるのであろう。ただし、それが聴き手にとって、好感を持つか・否か・ニュートラルかは、聴き手側の主観の問題。揺れ動き可能性さえもある。少なくとも演奏者は、最善を尽くしている。

涼風巻の涼風巻たる所以は「爽やかさ・清々しさ」を演出したお鮓(巻物)となる。猛暑・酷暑の時に召し上がって「清涼感」を存分に堪能していただけるようなコンセプト(設計思想)があり、それを踏襲した一つの表現「作品」として誕生し命名された。

素材が「旬」を保持している期間に何度も試作・試食を繰返し、当涼風巻Ⅲが「製品としてこれ以上やりようがない」完成形に辿り着けた時には、もう秋風が吹いていた。